

特定非営利活動法人 **アイユゴー通信** 第18号



〒590-0432 大阪府泉南郡熊取町小垣内1-10-18

TEL : 072-452-8340 FAX:072-452-5680

e-mail : snittaskmj0715@yahoo.co.jp

homepage : <http://aiyugo.fc2web.com>

目次

(1) みんなの手で国際協力を

ラオスの活動を振り返ると共に、今後のNGOと企業について考える

理事長 新田 幸夫

(2) 2011年度事業報告・決算報告

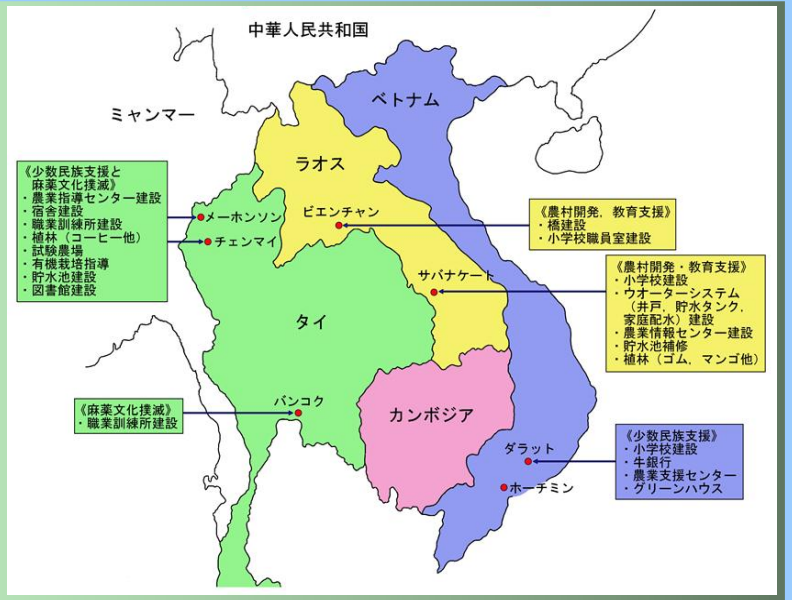
(3) 国際協力活動に必要な英語力をつける

近畿大学総合社会学部とダラット(ベトナム)大学
社会福祉学部の協働プロジェクト(別紙特集号)

理事 新田 香織

(右: アイユゴーの活動地域 2001年から2010まで)

- ・マダガスカル共和国(2009-10) 「アナラマンガ地方におけるパイナップルとシナモンの植栽による農村開発」
- ・ベトナム・ラオス・タイ・日本の4か国医療保健・福祉の合同セミナー(2007-10)



みんなの手で国際協力を!

特定非営利活動法人 アイユゴー理事長 新田幸夫

途上国での自立支援の10年を振り返ることは、夫婦で育てた10歳になる子どもが、どんなふうになったのか客観的に知りたくて、小学校の参観日に出席している時の心境のようです。



日本と比べると歴然と貧しい途上国の人たちの生活環境をどのように育てていくのか、現地の人たちと考え、それを見える形に展開していくうちに10年が経ちました。農業支援センターを建設し、グリーンハウスを作りました。コーヒーやゴムの木を植えました。まるで子どもたちに習い事を一つ一つ進めるようでもありました。こうした一つ一つの事業を例えるならば、点と点を結んで線にし、さらに点と線を加えて、平面を作っていくことを繰り返していきました。村の発展は、子供の成長のように、子どもの骨格がしっかりし、身体的にも精神的にも成長していくように感じました。

子どもが少年期を終え、独り立ちするために最も大切なことは、それまでの親子の信頼関係です。子どもが親に反抗する時期であっても、信頼関係があるからこそ子供は親に反抗できません。そうして、子どもが親から精神的、経済的に自立し、一方、親が子どもから一定の距離を置いて、

共に人間として語りあい、協力し合っていくことになると思います。私たちの活動もこれに似ています。

自立支援に必要なこと

途上国とその国を支援する国との関係を考えるとき、考えさせられるのは、紛争地域のことです。例えば話をアフリカに移します。今では民主化が進み、かなり豊かになっている国もありますが、未だに世界の中で紛争が多いのは依然としてこの地域です。紛争が続く地域に安定した生活は望めません。むしろ、いつまでも貧しい状況から脱出できないままにあります。

アフリカがイギリスなどの先進国から独立を始めたのは、1960年代でした。「民族の自決」が叫ばれ、「アフリカの年」と言われた時期です。アフリカや太平洋諸島などの植民地が、自分たちの自立した国民国家を求めて次々と独立していきました。

植民地時代のスポンサーであった先進国は、植民地が独立をするわけですから、資金提供をしなくなりました。人間で言うと、独り立ちをしたのだから、全て自分ですべきことは自分でしなさいというわけです。成人を迎えた大学生がある日突然、働きながら学ばなければならなくなるわけです。植民地の時には、資金提供を受けつつ、ただひたすら先進国の都合のいいように利用され、独立した国家になると、先進国は商業資本主義に巻き込まれようとします。

不安定な国内政治が紛争の勃発を引き起こしてしまいます。もめている家庭には誰も足を踏み入れなくなるのと同じように、どの国からもまともな支援が得られな



くなります。貧しいものはどこまでも貧しくなるという悪循環の状況になります。

支配をしていたスポンサーが急に手を放すと、植民地だった国は、結局は貧困から抜け出せなくなり、更に紛争を回避できない状況に追い込まれてしまう恐れがあるということです。「自立支援に必要なこと」とは、現地の人々が確実に自立し、その自立が持続し、少しずつでも豊かになる道筋を共に築くことになります。

ラオスの活動を振り返ると共に、 今後のNGOと企業について考える

自立支援のモデル事業の建設

アイユーゴーは、一つの地域が継続的に自立できるように見守り続けています。ラオスのサイフウトン郡の村では、かつて雨期に田植えをして、乾期の収穫を待つだけでした。収穫が終わると、何もする事が無いのだと嘆いていました。一方、飲み水や生活用水まで不自由を強いられていました。また小学校の校舎も崩壊寸前で、いつ壊れるのか親は心配していました。役場の人は「お金がないからほとんど何も出来ません」と、繰り返し言っていました。

地域の住民の人たちとアイユーゴーのスタッフとが集い、語り合い、まず、子どもたちの小学校建設(2003年)から取り組み始めました。子どもも大人も一緒になって校舎を建てようと、声を張り上げました。校舎が完成すると、「わしの子は医者になるよ」と顔をしわくぢやにしながら話してくれた村人もいました。村の住民たちはいわばスポンサーがついたと、大人も子どもも大喜びしました。

女性の仕事を緩和するために、井戸を作りました。女性たちは、1km先の井戸まで天秤棒をかついで水を汲みに行っていました。更にパイプラインで小学校内にタンクを設置して、家庭まで配水しました。(2004年)完成を見届けて自動車でも帰ろうとしたとき、村の女性たちが2列に並んで見送ってくれました。車が通過するときに見た女性たち全員の涙は今も忘れられません。

小学校の裏に雑木林がありました。その雑木林の中の右側が男子用、左側が女子用のトイレでした。子どもたちの切なる望みとして本物のトイレを完成しました。(2005年)

今度は親の仕事を作ることにしました。「働かざるもの食うべからず」です。農業知識・技術を共有できる農業支援センターを建設し、試験場を整備し、ため池の修繕工事、そしてゴムの植栽を始めました。(2007年)



最も大切な仕事は、ゴムの植栽をする人の選別でした。植栽・管理のできる人、できない人など様々な村人がいました。植栽を開始していつの間にか放り投げている人もいました。理由は「疲れるから」でした。そんな中、農業支援センターには農業経験が豊富な人が役場からやってきて、

いろいろ世話をしてくれました。そのうちゴムを植栽する人たちを見て、ヤル気がでた村人が現れてきました。中には「女房がやってみろというんだ」という人もいました。それで、その次の年もゴムの植栽を支援しました。様々な場所で村人が植栽を始めました。

1mの円の中に1本のゴムの若木を植え、その円の中は草を取り除き、その他は保水のために雑木林のようにしたゴム園。きれいに整地をして1.5m四方の間隔をあけて作ったゴムのプランテーション。雑木林を整備し、枯れ木を切り倒し、その周辺には花やバナナなど果樹を植えたゴム園。今では村人自らがいろいろな工夫をし、まるで村が呼吸を始めたようです。

農業支援センターの担当者(センター長)がパイロット的なゴム園を選ぶなどをすることで、村人のモチベーションは一段と上がることになり、お互いのゴム園を見物するようになりました。やがて、農業支援センターでの指導が必要となり、センターの周囲にフェンスを設置し、試験場を建設しました。(2009年)自分たちでビニールハウスを作り、苗床を作り、苗木を栽培し始めました。実験も行なうようになりました。

農村地帯の恒常的な経済的貧困を少しでも解消させるために、これから先は、経営・管理を担う人材が育ち、自立支援の指針を作っていかなければなりません。

そのような活動と並行して、同地区において、更に小学校、図書館を建設し(2010年)、子どもたちの教育環境の充実を図っていきました。子どもの教育支援は、子どもばかりか大人たちに対し新たな夢を与えることになり、大人たちが一つ一つの活動に参加するモチーフになってきました。

これから成人する子どもたちに区切りとして、成人式があるように、自立支援の過程での事業の検証も大切になります。それはさらに上のステージに上るための検証でもあります。

新しい協力体制を目指して

自立支援に必要なことは、ハード面だけでなくソフト面も欠かせません。経営、法規、あるいは人事などに関する知識や実践方法が、次の世代に伝わるようにしなければなりません。支援活動を始めたころ、村の長老や村長などが集まり、外国人が来るといふ物珍しさも手伝ってか、協力活動に積極的にかかわってくれました。しかし10年が過ぎると高齢化も進み、アイユーゴーの創立メンバー3人がすでにお亡くなりになったのと同様、現地でも関係した人たちが3名以上亡くなっています。こうした状況の中で、一定の環境作りが完成に近づくと、持続可能な循環システム(ソフト)を作らなければなりません。そのためにもこれまでの事業(ハード)の検証が必要となります。

検証ーラオス



村の風景



村人とこれまでを振り返る

その事業を検証するために本会副理事長である中西省吾氏が2月6日から11日までベトナムを経由して、ラオスのサバナケート県サイフウトン郡に入りました。



ゴム園にある新たな水源



天秤棒で水を運ぶ女性たち

3) 小学校の教室の壁が大きくひび割れ、放っておくと崩壊の可能性がある。またトイレの処理タンクのコンクリート壁が壊れ使用できなくなっていること。

4) 以前植えたゴムの苗木は、接木されたものを植林したが、苗の接木の意味や方法が理解していないこと。などの課題も新たに分かりました



フォンソンホン村小学校

中西氏は、約10年の自立支援の成果はあったと評しています。評価できる点は以下の通りです。

- 1) その村は「日本の村」と呼ばれている。今までの日本からの土木・建築・水道・農業に関する技術指導が村人に伝わり、隣村からそれらの技術教えてほしいとの要請があること。
- 2) 自立支援の機器や道具も隣村に貸していること。
- 3) ゴムの木栽培において、水やり用の井戸や新道路建設を村人の出資金で作ったこと。
- 4) ゴムの木の実を採取して苗木作りも始めていること。一方で新たな課題もあります。
- 1) 既存の井戸が地滑りにより井戸の一部が壊れ、井戸水が泥水化していること。(この水は煮沸しても使えないと思った。)



泥酔化している井戸の中

2) 新しい井戸は、村から約1km離れた所にあり、毎日、主に女性と子供が天秤棒とバケツで水運びをしていること。これはかなりきつい仕事となっている。



教室の壁(左) 基礎部分のひび割れ(中央) トイレの処理タンク(右)

一方で、数年前に作った井戸が生活用水として整備することにしたが、ゴムの木の水やりに掘られた井戸から偶然『透明で無味無臭の水』が出たということから、現在ではそれを飲料水として利用している、こうした現状を踏まえ、我々は持続可能な村の再生を考え実行に移そうとしています。ゴムの樹液を利用した企業作りもその一つです。

自立支援一事業の企業化

企業とNGOの協働の重要性が叫ばれています。本会は日本の企業から多大な支援をいただいています。企業からすれば、この支援は社会的責任として責務であるといえるのかもしれませんが。企業とNGOの関係は、国際的な活動をするNGOを通して、企業の経済的収益のみならずグローバルな意味における環境や社会の側面にライトを当て、それらを改善しながら収益を上げていくような取り組みが求められています。企業がうまくNGOを巻き込んで、社会的にまたグローバルに貢献することが重要です。

一方、本会は、企業・財団の助成金の支援を受け、自立の基礎づくりを終えると、現地の住民による、住民のための、住民の企業の創造を考えています。恒常的な貧困からの脱却は、システムの構築を通して、長期にわたる経済的・精神的自立が確立されてこそ実現します。今ここで手を放すと、自立への支援が崩れ去ってしまうと言えます。スポンサーがいなくなって利権争いで国内が断片的になったアフリカそのものとは比較できませんが、国の独立・自立に関しては、取り組み方を間違っては元の本阿弥になってしまう点は共通しています。

さて、2007年にこの郡でゴムを栽培し始めて以来、現在、

村には総計およそ 3 万本以上のゴムの木が育っています。先ずは、ゴムを換金作物として村で栽培し、自然環境が破壊されつつある村を「緑の村」と呼ばれるようにし、ゴムを製品化する工場を作り、若者たちが働ける村づくりをしようと、本会は、訴えました。

若者たちの仕事は、1) ゴムの植栽 2) ゴムの樹液の収穫、3) ゴムの樹木の管理、4) 市場調査、5) 製品のデザイン作成、6) 製品化・加工化 7) 市場の確保、8) 運送、9) 販売、10) 製品管理、11) 企業経営など様々な部門を考えることができます。

日本ばかりでなく、国連から最貧国といわれるこのラオスにおいても、少子高齢化が進んでいます。若者は中学校や高校を卒業するとサバナケートの町か、タイの国に働きに行ってしまう。一日も早く若者たちが村を受け継ぎ、ラオスの国のために働けるよう環境を整えることを村人と進めようとしています。

2011 年度事業報告・決算報告

2011 年度事業報告

(平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日)

(1) 教育支援プロジェクト

- 1) ベトナムにおける少数民族のための小学校建設
少数民族の人たちの要請に基づいて、ベトナム社会の中で子どもたちが孤立しないように小学校教育の充実を図るために建設を行う。(2012 年度に実施)
- 2) マダガスカルにおける図書館建設
貧しい子どもたちの教育環境の充実を図る一環として図書館を建設する。(検討中)
- 3) マダガスカルにおける井戸建設
小学校を中心としたコミュニティに井戸を建設する。(2012 年度に継続)

(2) 農業地域開発プロジェクト

- 1) マダガスカルの環境保全のためのウオーターシステム建設と植栽活動地滑りの可能性がある場所から数十メートル離れた場所に七メートル四方の砂防ダムを造成する。さらに、パイプの設置と泥水を浄化できる水溜の建設。また、下流においては植栽活動を推進する。(2012 年度に継続)
- 2) MDバードキャンペーン
マダガスカルの鳥を守るための他国との連携システムを作る。(2012 年度に継続)

(3) 神戸大学大学院保健学研究科との共同事業

(2012 年度に継続)

(4) 日本の国際協力事業へのアドバイザーとしての参画

- 1) 津山国際交流の会の海外事業への参画
津山国際交流の会との共同プロジェクト「ベトナム・ダクラク省クロンノ郡」レンクツラック(ムノン族小学校建設の無償建設) 事業への参画
- 2) 近畿大学総合社会学部との共同事業
近畿大学総合社会学部とベトナム・ダラット大学社会福祉学部の学生の協働プロジェクトの支援

(5) 自主事業 (ワークキャンプ)

本会での事業現場で、村人と文化・技術の交換を通じた交流。

- 1) ベトナムの農業センターにおける農業推進協力
(2012 年度に継続)
- 2) タイ北部のコーヒー事業の設置協力
(2012 年度に継続)
- 3) ラオスでの小学校と図書館における子供たちとの文化交流
(2012 年度に継続)
- 4) マダガスカルでの環境問題を考えるエコツアー
(2012 年度に継続)

ゆう
ちょ
銀行
:
0093
0-9-
1442
52
発行:
新田幸
夫
編集:
加藤鐘
三
発行
者:
(株)
フジカ
ク

2011 年度収支決算 (平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日)	
科 目	決算額 (単位 円)
1. 会費収入	721,000
2. 寄付金収入	111,027
3. 助成金収入	0
4. 自主事業収入	720,000
5. 雑収入	52
6. 繰越金	24,635
7. 借入金	0
8. 未収入金	0
収入合計 (A)	1,552,079
I 事業費	
1. 資材費	0
2. 現地事業運営費	0
3. 現地スタッフ経費	0
4. スタッフ・専門家派遣経費	1,089,397
5. 事前調査費	0
6. 現地管理費	0
7. 国内事業費	0
事業費小計	1,089,397
II 事務管理費	
1. 事務所管理費	465,441
2. 交通費	55,010
3. 宿泊費	11,800
4. 食事費	4,725
5. 協力費	10,000
6. 会議費	7,060
7. 助成金返還金	343,486
事務管理費小計	897,522
支出合計 (B)	1,986,919

*会費収入 : 正会員 一口 12,000 円以上、賛助会員 一口 3,000 円以上、
法人正会員 一口 120,000 円以上、法人賛助会員 一口 30,000 円以上

【感謝】

(特活) アイユゴー通信をご覧いただき、誠にありがとうございます。私たちは自らの知識・技術・経験と奉仕の精神を持って、協力を必要とする人たちの自立を目指した開発援助を通じて、その地の文化を尊重理解し、草の根の友好親善と、自らの人間としての価値を高めることを目的とし活動します。皆様のご参加・ご協力を心からお待ちしております。

e-mail : snittaskmj0715@yahoo.co.jp

HP : <http://aiyugo.fc2web.com>

【振込先】

[特定非営利活動法人 アイユゴー 理事長 新田幸夫]
三井住友銀行 阿倍野支店 : 7,479,470